巻頭言

We will meet again !

立教大学チャプレン　浪花　朋久

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。また進級される皆さん、おめでとうございます。皆さんが、それぞれの学び舎で同級生と共に過ごした時間はいかがでしたか？様々な思いがあると思いますが、立教での時間は皆さんにとって人生の基盤となっていくと思います。事実、立教を巣立っていった多くの方々が、この学び舎での生活が「今」の自分にとって必要な道だったと実感していらっしゃいます。そんな私もこの３月でチャプレンとしての任期を終え、４月から出身教区へ戻ることになりますが、ここでの生活は、私にとって第２の人生の基盤になったと胸を張って言えます。

ある体育会の記念式典の打ち合わせの時、あるOBの方が開口一番に「折角の記念式典ですから、立教らしく礼拝で始めたいのです」とおっしゃいました。この方は信徒ではありませんが、現役時代、部活のメンバーたちと共にシーズン前の祈りをチャペルで献げることに、言葉にならない思いをお持ちでした。卒業して社会に出てからも、ふとした時に礼拝の雰囲気を感じることがあるそうで、祈りをもってシーズンに入るその習慣から、「何かを始める時に祈る」という今の人生の基盤が生まれたようです。

また他の場面でも、人生の基盤を感じることがありました。ある冬休み明けの土曜日、朝の祈りが始まる直前になってもチャペルには誰の姿もありません。新年早々だったこともあったので、「一人で礼拝か」と少し寂しい気持ちになりましたが、礼拝が始まろうとした時、ある青年がチャペルを訪れ、この方と二人で朝の祈りを献げました。見たところ、始めて礼拝に出席されたようだったので、礼拝後に声をかけました。聞くと、この方は立教大学の卒業生で、冬休みで東京へ帰省されていました。冬休み直前、仕事で少し行き詰まったことがあり、心の中が乱れていたのです。そして、この日、気晴らしに朝の散歩に出かけたところ、青春時代を過ごした立教に足が向き、吸い込まれるようにチャペルに足を運んだそうです。この方は、お話の最後に「初めての礼拝でしたが、心が晴れた気持ちになれました。ありがとうございます」と明るい表情で、再び社会へと巣立っていきました。

原点回帰について、新約聖書のエフェソの信徒への手紙の「あなたがたは、もはやよそ者でも寄留者でもなく、聖なる者たちと同じ民であり、神の家族の一員です。」(2:19)という言葉を思い出します。立教を出たからといって、その日から他人になるわけではありません。皆さんはいつまでも立教コミュニティーの一員として、社会を歩んでいくのです。その際に忘れてはならないのが、普遍的なる真理を探求し、私たちの世界と社会と隣人のための生き方を示す、立教建学の精神「Pro Deo et Patria」です。また何かあった時に安心して戻って来られるのも立教です。卒業してから人生に行き詰まった時、原点に戻って自分を見つめ直そうと母校に訪れると、お世話になった教職員がいつでも笑顔で皆さんを迎えてくださいます。だから安心してここを巣立って行ってください。

立教という大きなファミリーの一員に迎えてくださったことを、この場をお借りして皆様と神様に感謝申し上げます。立教での経験と建学の精神を胸に、私もこれから生きていきます。再会できるその日まで、お元気でお過ごしください。